日米のリーダーによるスピーチの分析—日米語対照研究—

異文化コミュニケーションゼミナール　1314050　堀田　恒成

１．研究動機・研究目的

近年、観光や留学等の目的で日本を訪れる外国人の増加や、世界共通言語である英語の公用化、TPP による関税の引き下げなど、日本のグローバル化に向けた取り組みが急激に進んでいる。筆者は２年次、アメリカで一ヶ月の語学研修を行った。研修は主に、コロラド大学に所属している様々な国からの留学生が勉学に励んでいる、IEC(International English Center)という機関で行われた。インド、サウジアラビア、中国、韓国などの留学生は、決して適切な発音、文章ではなくても活発に発言し、意思を伝えていた。しかし、日本人留学生は、発言の回数が少なく、発言するタイミングがあっても文法ばかりに気がとられ、流暢な会話を行うことはできなかった。こういった違いは、もちろん個人の人間性によるものもあるが、根底には日本の英語教育やそれを作り出す日本文化にあるのではないかと考えた。そして今や、英語習得や日本人特有の内向性からの脱却は、日本人が国内のみでなく海外の場で活躍し、日本の国際的地位を向上させるための重要な要素であり、グローバル化には決して欠かせない課題となっている。そこで、本研究では、これらの課題を解決するため、そして異文化理解を深めるため、日米両国の話者の言語表現と非言語表現を比較し、日本人のスピーチにおける課題点とその改善方法を検討した。日米語の言語表現の違いが顕著に現れるうえに、ジェスチャーなどの非言語表現の比較も正確かつ明瞭に行えるため、今回は、日米の政治家によるスピーチ・演説を研究対象とした。具体的には、日本と米国の言語表現の違いや非言語表現（ポーズやジェスチャー）の使用頻度を数値化して比較し、その使用実態を明らかにした。また、非言語表現については使用回数に加え、スピーチの中でどのような役割を担っているか分析を行った。

２．研究方法

本研究では、2000 年以降の日米両国の政界のリーダーのスピーチの映像を分析し、言語表現、非言語表現の特徴を比較することで、その類似点や相違点を明らかにした。ポーズの頻度や時間、ジェスチャーの回数の数値化、パラレルストラクチャーやリフレーズの分析による日米語比較を行った。分析対象とするスピーチは、インターネット上で閲覧できるものとした。日本のスピーカーは、安倍晋三、菅直人、鳩山由紀夫、麻生太郎、アメリカのスピーカーは、ドナルド・トランプ、バラク・オバマ、ジョージ・W・ブッシュ、ビル・クリントンである。この計 8 名、11 のスピーチを分析した。スピーカーが話し始めてからの 5 分間を分析対象とするものと、15 分間のスピーチを分析対象とするものに分けて研究することとした。前者の分析は、非言語コミュニケーションであるジェスチャーの種類と頻度を公平に比較するためで、その時間には、聴衆のスタンディングオベーションや長めの拍手などといった、スピーカーの意図によらず生まれた間合いの時間は入れないものとした。後者の分析は、スピーチの談話分析、特に parallel structure やキーワードの rephrase のためであった。

３．主な結果と考察

アメリカの演説におけるスピーカーの非言語表現は、日本のそれに比べて非常に多いことが、今回明らかとなった。一回の演説において、米国のスピーカーは、日本のスピーカーの約４倍のポーズ数であった。ジェスチャーについては、アメリカのスピーカーが多様な手ぶりを行うのに対し、日本のスピーカーは、ほとんど手ぶりを行うことはなく、淡々と演説を行うことが観測された。これらの結果から、演説における日米語の非言語表現の使用頻度は、極端に異なっていることが明らかとなった。

日米両国の演説におけるスピーカーの言語表現、特にリフレーズとパラレルストラクチャーについて分析した結果、リフレーズの使用頻度には著しい差違が観測された。しかし、パラレルストラクチャーについては日米間の相違点は見られず、数値の差は国に関係なく、スピーカーの特徴によるものが大きいと観察された。

４．結論

アメリカでは様々な国籍を持った人々が生活している。そういった環境の中では、話す言語が異なっていたり、英語を話していても発音やイントネーションに個人差が存在していたりと、ことばのみでコミュニケーションを取ることが困難である。そのため、何とかして情報を伝達するために、リフレーズやパラレルストラクチャー、ポーズ、身ぶり手ぶりなどを使用することが多い。また、積極的に人とコミュニケーションを取る文化であるため、日本でいう暗黙の了解のような曖昧で抽象的な表現が使用されることが少ないのである。このような背景から、スピーチ内の言語・非言語表現の使用実態において、これほど大きな差違が観測されたと考えられる。グローバル化を志すのであれば、日本のスピーカーは、アメリカのスピーチから言語・非言語表現について学び、実行すべきである。

５．卒業論文の執筆を終えて

この卒業論文の研究テーマは、期待以上に面白い内容であった。いくらでも掘り下げることができるが故に、分析に没頭してしまい、睡眠を忘れてしまうほどであった。このテーマを選んだきっかけは、須藤路子教授の異文化コミュニケーションゼミナールによるところが大きい。３年次に異文化コミュニケーションゼミナールに入り、英語を異文化理解の観点を踏まえながら学んだ。異文化コミュニケーションゼミナールに入った理由は 2 つあった。1 つ目は、元々英語が好きだったという極めて単純なものである。2 つ目は、2 年次のコロラド大学研修プログラムに参加し、アメリカの文化に直接触れ、日本人と関わっているだけではなく、世界に目を向け、さまざまな考え方を持った人々と関わりたいと考えたことであった。TOEFL、スピーキング、プレゼンテーションなどの英語能力はもちろん、社会に出るためのマナーや海外と日本の文化の違いなどは、このゼミナールでしか学ぶことができなかった。ここで得た知識や経験を次のステップでの成功につなげ、さらに自分を磨き、自らの人生観を築き上げていきたい。ゼミナールで共に学び合った友人を含め、筆者の 4 年間の大学生活に関わってくださった全ての方々に心から感謝したい。最後に、本論文を作成するにあたり、指導教員の須藤路子教授から、丁寧かつ熱心なご指導を賜った。また、蒲原先生から、様々なご指導を頂いた。ここに、心からの感謝の意を表したい。